

いては生母磯野禪師の生い立ちから這いつて来て明白となる。阿波の山脈が南方に伸びつつ北は瀬戸内海に臨み前に浮ぶ小豆島を指呼のうちに眺める風光明媚の漁村、之が讃岐の小磯港と云うところ（現在香川県大川郡大内町大字丹生の小磯）ここが静の母イソの郷里である。今を去る約八四十年前の頃、この小磯に庄左衛門と云うかなりの富農があつて堺、兵庫を相手の運送に要する舟舶も相当揃えていた。ここに生れたイソはすくすくと成育、七、八歳の頃から歌や舞を好み、竹や木切れを持って片言交りの唄を歌い歩き、ひとりで踊っていたというから里人によく目立ち物珍らしく可愛がられた。

寿

御承知の如く昨秋から引きつづき新春にかけて大杯を喜寿以上の会員諸兄に贈呈して来ましたが、来る昭和四十一年度にも該当の方々へ御長寿をことほぎ度いと存じます。就いては明治二十三年御誕生の方は生年月日を御記入の上至急本部迄御通知下さい。出来るだけその製作を急ぎ明春元旦貴家の賀祝に間に合せ度く心遣っております。今春喜寿大杯の贈呈に対し松岡国馬氏から感謝の御寄附がありました。

長承二年イソが十二歳のある日、浜辺で荷役をしている船頭達のかけ声が余りにも面白いので浜に出て舟の中の荷物陰で遊んでいたのがその内にそのかけ声を聞きながら遂に眠り込んでしまった。よく眠ったものでフト眼が覚めて見ると、舟が見知らぬ港に着いていた。兵庫の港らしい。之にはイソも驚く事は驚いたであろうが之亦勝負強い彼女、何とかなるだろうと巡礼歌のお弓ではないが流浪の旅をつづけ歌を唄い舞を踊り、花の都へ辿りつく事が出来た。これは日頃から都の地を憧れていたのかも知れない。物珍らしく都見物をしている折りしもイソの目にとまったのは、若い娘達が盛に出入している紅がら塗りの格子戸のある家、ここが時めく芸能指南の大御所、青柳師匠の宅であることに気が付いた。元来感のはたらくイソは落着くところはここぞと頼んで女中に住むべく根をおろした。青柳師匠も格別イソを愛し十三歳にして一躍内弟子となり磯と名乗って一層精進することになった。当時この青柳師匠方へ、公郷藤原通憲も出入していた。彼は教養も高く、しかも諸芸に堪能であったので後白河法皇のおぼえも目出度く寵を受けていた。恒に磯を

眺めては「末頼もしき乙女よ」と学問の道、作法、舞踊の一手を喜んで別に自ら教えた。磯は其の甲斐もあって久安二年二十四歳にして禪師号を拝受した。愈々ここに「磯野禪師」として一派を成すことが出来たが、性来の剛氣で男共は齒が立たずもち前の風格の男優さりは一層彼女の人気焦点となり都人からも慕われて来た。

才媛の磯野も人の世の常、行き末を深く考えてか遂に仁安三年さるやんごとなき君を見込んで契りを結び仁安三年未だ色香褪せぬ四十五歳の春、静御前を生み落した。梅檀は二葉よりも芳しく、静も母に似て一段と容色麗わしく絶倫の器量は又母に増して評判となる。静十一歳を迎えた治承四年は賢孔門院（平清盛の女）徳子が安德帝を生み給い京落はもとより津々浦々慶祝の渦を巻き起した。この時静は母磯野、青柳師等に伴なわれ、はじめて宮中へ舞楽に参じた。少女とも見えぬ巧みな振り舞は否の打ちどころなく素晴らしいものであった。

翌年十二歳にして格式の白拍手を授けられ「愛らしき白拍子、女神の静よ」と益々光彩を放つ日が訪れることとなった。

寿永三年国中大旱魃で五穀草木枯死寸前と云う惨状を呈した。その様子を聞き召された後白河法皇も憂慮の末、洛中から舞姫百人を集められ神仙苑の舞殿で雨乞いの踊りを催された。舞姫の中にあつて一段と美しい静の即詠の歌は、

「ちがやの下葉 おとづるは

三鳥入江の氷水

春立つ空のわか水は

汲めども汲めどもつきもせず

と琴の調べに合わせ高らかに詠じた。静がこの歌を唄いつづけ、その踊りがすむかすまぬに天の感能するところとなり、一天にわかにかき曇り車軸の雨を流した。この慈雨は都一円蘇生の思いに、大衆は濡れながらに狂気のごとく叫び雀躍した。御簾の中なる法皇もこの由聞こし召されて竜顔麗わしくご褒美として御札に着甲の蛙、蟻、竜（がまりよう）の御衣を辱くもお手ずから御下賜となり、しかも「そちは神技も及ばぬ術の持主だ」と優握なるお言葉を頂戴大いに面目を施すことが出来た。さてその時之をどこかで陪観していた義経、静の才媛に食指を大いに動かしその夜自分の館へ静を呼び寄せた。日ならずして法皇は義経を召されて、静との仲を許し無想だに

しない白河御殿までも下賜されることになり、義経程のつわものも静と顔を見合せてこの倅を喜んだ。この成り初めから風雪世の移り代り平家を亡して後静と義経の仲も、諸行無情、遠寺の鐘の響きに散る花に似て吉野落ちとなって雲か霞か何れにか消えて去った。静はその後生母イソ

の誕生地讃岐へ帰ったものか、東讃大川郡に願勝寺という古刹に静御前の手植の松、又静庵に静の墓もあり苔むす中に月は舞姫の生涯を悼みて照り輝き、訪れる人を待ち焦れている。

狐の雨 静が被むる 花の笠

新札と伊藤公

金子・西川（玉之助）両翁との因縁

沢村 亮 一

昨年新しくデビューした新札は、今迄の敵めしいクラシックな、烏帽子直衣の聖徳太子のポーズに代って、色調姿態とも近代感が溢れ黒子さえ、鮮かに面へ点描された、印象的の伊藤公となった。公は明治の元勳、日韓併合の本尊みために世に流布され、日韓国交平常化途上の時点（三九、四）に於て、どうも此デザインは民族感情に与うる影響から、薰しくないではないかとカゲの声がないでもない。

現に其の具体的な現われとも云うべき、戦前京城に建立の荘厳な公の

実正誤の意味を以って其の後日物語をここに紹介する。但し史実と若し合致しない所があれば、夫れは聞き手の健忘症から多少のロマンで、形を整った結果で、もとのフィクションやエプリルフルでないことは公言して憚りません。さて公の統治の理念は、韓国は飽くまで日本の保護の下において、自治を与えりドするのが本命とのビジョンであった。

一方山県公を主班とする軍閥は、圧倒的に合併論者で文治派の、公の消極意見に嫌らず論旨貫徹の為め腐心しあらゆる劃策をめぐらし、当時法螺丸の通称で名高かった惑星の、

杉山茂丸を引出し日韓併合のシナリオをつくったのであった。法螺丸が公の邸に現われ、髪結新三劇の家主長兵衛との纏の珍問答みたいな、名台詞のやりとりが開幕と同時にかわされたのは申す迄もない。法螺丸曰く韓国の現状は恰も将に清算に入らんとする社会に対し、拝啓貴社益々御隆昌之段奉賀候の冒頭挨拶が発せられたみたいで、閣下の爾来の主張は之に該当する、何も之に因て論旨が拘束されたり、前後撞着などするものでないと縷々大に説服に努めたれど、公は容易に耳をかさなかつ

た。そこで法螺丸は話題を転じて、寺内子の事に触れると公から彼ならやれるだろうと洩らされた。智謀に長けた法螺丸がどうして此を見逃がしにするのですか、それかあらぬか聽て公の統監政治は、明治四十二年の六月に曾弥子に引継がれ、翌年の五月にはピリケン陸相の兼務となり其年の八月二十二日を以って韓国併合の詔書が、寺内統監の名に因り公布せらるるに至った。韓国の国号廃止と元首の退位は、李完用の強い抵抗にあつたが、李王も遂に断念して調印受諾の断を下し、慨然として退出の一幕もあつてさしもの併合劇も大団円となった。

次にハルピン駅頭で公を暗殺した安重根にまつわるエピソード。西川玉之助翁（元日沙商会）は終戦後、邸宅が進駐軍に接収せられ、離れ小庵に蟄居していた、二十三年八月八日のことである。当時翁はひどい皮膚病に冒され、上半身を素裸にし白い膏薬を、一面に塗りつぶしそよ風にあてて新聞に目を通していた。声をかけると開口一番、此頃の進駐軍の高飛車はシャクの種と憤懣をブチまけ、僕は余り悔しいので得意の英語にものを云わせ、G・H・Qに直訴に及んだ所、葉がききすぎ兵庫県

から係り官が慌てふたむきやうて来て、どうか隠便に頼む、此際アメさんのご機嫌を害うと、跳ね返りが怖いと頻に頭を下げるので、此も敗戦の憂き目かなあと、諦めてホコを収めたことであつた。余談はさて置き翁は言葉を通じて、時に是非君に見せたいものがあると、一幅の掛地を奥から取り出した。一瞥すると墨痕淋漓、庚戌（四二）三月於旅順獄中大韓国人安重根書とある。

康工難用連抱奇材、

子思聖人用人猶匠之用木取其所長棄其所短故杞梓連抱而有數尺之朽良工不棄

浅学の私には手剛く、一応メモに留め後日金玉均や朴泳孝などの書を蒐集の、旧師に尋ねてみると、文意は、二人で手を合せて抱える程の巨木でも下手な大工さんは短所があると思ひ切れない、自分の如き、人間はとも使ひこなせまい、と胸を張ってリキんだ所だろうと。安が果して自負する程の大物かどうかは姑く



庚戌三月 於旅順獄中 大韓人 安重根

安重根最後の筆蹟

措き、墨跡文章などから推理し唯の安ちゃん乃至眼に一丁字の無い不逞の輩と、一蹴するには当らないと認識を新にしたことであつた。而して縁は全く異なるもの終戦後、安の孫が、或る日翁を訪ひ祖父の絶筆を見せてくれと云う、軸を上げると如何にも懐しげに吸いつくみたい、眼を細め最後に黙禱して立去つた。そこで私からどうして此絶筆が翁の手にあるかを伺つてみると、安が兇行（四二、一〇、二六）後逮されて旅順で愈々裁判に附せらるることになり、自分が関東庁から其弁護人を委嘱され、彼の為に面倒を見てやつた時の記念品だ、その当時安はカットリック信者で三十二歳の壯齡であつたと。私が翁に辞去の挨拶をする時、暫く待つてくれと色紙を持出し、此は金子さんの染筆、自分が喜寿の賀を迎え健康が勝れず、種々の病に罹り全く病気のデパートみたいだと、ボヤいて居たのが翁の耳に入り。残生は二十三ある喜の祝百貨店と

は百ヶ年なり、西川君喜寿に寄す
片水
と染筆懇に慰撫された時の記念、此のバトンを君に引継ぐと云う。洵に願つてもない拝領物に、涙がこぼれ此は長寿にあやかるお守札を賜つたみたいと肝に銘じ頂いて家宝として居る。最後のむすびに公にゆかりのゴシップ、一題を付け加えペンを擱く。

議事者身在事之外順審利害之情
任事者身在事之中宜忘利害之慮
朝鮮總督府の史料記念館に於て、眼に留つた公の坐右銘御存じの菜根譚の一節である。

墨跡箴言とともに流石に公の人為りをイメージュするにふさわしい貴重な文献である。

或日金子さんの事伝を齋藤總督に取次の機会に、此に触れ垂涎措く能わぬ旨を話し揮毫を懇願して辞去した。よもやと思つていた頃、官邸から使者があり齋藤実書卓水落款の上に、懇に為め書までして届けられた。此時程バックの難有味を満喫したことはない。

字は一点一畫もゆるがせにしない規格の正しい書風であつた。書の序に日韓併合に偉勲の有つた、李完用侯は、実に雄健端雅の能筆家であつ

（三九、四）
（太陽鉦工KK大阪支店）

私の遍歴記

高石淳

此度大阪日立冷械株式会社の神戸出張所の開設と共に当地勤務となり市庁前松井ビルに事務所を開くことになりました。久方振りに懐しい神戸の山々を眺め、又神戸の発展に驚いて眺め歩いて居るうち、三神に太陽鉦工の分室のあるのを見つけ辰巳会の本部であり茲には彦島当時の旧友、笹記為三郎氏が居られる筈と訪ねて見たところ、同氏は既に一ヶ月程前に八十歳の高齡で物故されたと聞き驚いたが、辰巳会の会員であることを申して同室に居られた幹事の柳田義一氏に面会し、私の鈴木商店時代の経歴を述べ、当時の思出と共に御厄介になった方々の消息等も伺い得て楽しい一時を過しましたので、この機会に会誌「たつみ」の誌上を拝借して私の思出の一、二を申述べさせて頂きます。

一、経歴

私は大正六年蔵前の電気科を出てその七月鈴木商店に入社、最初に勤務したのは神戸製鋼所の依岡専務の

主宰する臨時発電水力調査部（日沙商会の二階）であつた。その後中津川水電、鈴木商店工部部、太田川水電と転じ、更に大正十三年彦島のロード式窒素工業株式に転じ電気技術者としてアンモニア合成工場の建設及びその運転に従事した。昭和三年に至り吾々が予想だにしない鈴木商店の瓦解となつた。

その間下関の山陽電軌にも関係して発電所の建設、電車工事等の手伝をした。この間に多くの方々の御厄介になり思出の深い方々が沢山ありますが挙げれば限りがありません。直接の長として御指導を賜つた方々は依岡様、竹岡（筍）様、山岡様、田子（富）様、吉本博士、織田様、二階堂様、武岡（忠）様、加賀林様、菊地様、辻濠様、中尾様等でありますがこの内既に他界せられた方が多いので感慨深いものがあります。アンモニア工場が三井鉦山に売られることになり、私も工場について三井に行くところであつたが、その時元

鈴木商店の製油所であつた合同油脂グリセリンの兵庫工場の電気施設が火災のため灰燼に帰し、私はその電気主任技術者として名儀を貸してあつた関係で呼び戻されてその復旧工事に従事した。そこで再び鈴木商店関連の事業に従事することになった。其後会社は昭和十二年日本油脂の傘になつたが、私はこの兵庫工場に十四年、戦争中は上海工場、終戦後は王子工場、本社、大阪支社と転じて昭和三十四年私の半世を捧げた日本油脂を退くことになり、爾後日立関係に二度の勤めを得て現在に至つて居ります。

二、思出

水力電気調査部では調査、測量、設計、申請、等が主なる仕事で遂に工事には至らなかつた。

私が電気技術者として思出深いのは彦島時代と兵庫工場である。彦島ではフランスからアンモニア合成工場のワンユニットが輸入されてフランスから技術者が三名来られて建設の指導を受けた。お蔭で私は新しい多くの電気機械器具を手にした。又ゲージ、メーター類も私の管理下であつたので一〇〇〇気圧の圧力計、窒素と水素の混合比率をガスの比熱の差によって正格に表示するメータ

た。侯は外貌白哲瘦軀大立ものと思えぬ貧弱であつたが、炯々たるまなざしは氷の如く冷静を表わしていた。是に反し齋藤總督は童顔肥満悠揚迫らぬ温容で、実に可い対照であつた。李完用侯が景福宮で曾弥子森槐南と共に、伊藤公の惜別の宴（四二、七）の席上四氏聯作の七言絶句を、侯が揮毫した書幅を手に入れていたが終戦後の引揚ゴタゴタに総督の書と共に惜しくも喪失してしまつた。

平仄の第一句は井雨初来霑萬人第四句は両地一家天下春と、日韓併合を謳歌した絶句であつたが、中間の二、三句はどうしても思い出せない。其後韓国の政情は実に猫の目みにたいに変わり、スキートホームは翠帳紅閣から同床異夢になり、刺え兄弟牆に闘ぎで南北に離散するなど、一家団樂の春の青写真は、全く秋風索漠の幻滅と交つてしまつた。げに時の流れと時代の変遷は、哀歎を他所に諸行無常と響く祇園精舎の除夜の鐘の如く、刻々一期一会の余韻は年々歳々つくる所がない。

（現在のCO₂メーターの原理）などはまだ日本では初めてであつた。又一〇〇〇気圧のコンプレッサー、合成塔、及びそのカタライザー、一〇〇〇気圧用鋼管の熔接技術等、当時の吾々には新技術であつた。又国内製品であるが三三、〇〇〇V、四、四五〇KVAの特高屋外変電所の建設は当時としては進んだ方であつた。又山陽電軌では直流変電所の建設、電車工事等よい経験であつた。其後兵庫工場に転動してからは先づ電解用直流変電設備の復旧工事、電解槽のガス漏洩を完全にとめた改善修理、「ユングストロームタービン」による自家発電所の建設等は快心の経験であつた。以上は私は電気技術者としての思出の仕事であるが次は私が電気屋から油屋に転換した思出である。昭和七年長郷工場長が魚油（鰯油）を原料とする食用油脂製造の研究のためドイツに行かれ、ブロックス氏と言うリバーブラザーの工場に居つた技術者を連れて来られ、兵庫工場にそのための研究所を設け極秘の内に彼に研究せしめることになつた。そしてそのログ氏の下につけられたのが油脂には全く白紙であつた私と、運転にベテランの神田君であつた。私はロブ氏の言う